

平成16年度重点基礎研究の概要

企画部科学技術振興課が予算化している競争的資金による研究事業です。平成16年度は、次の4課題が採択となり、研究を実施しています。

○ 平成16年度研究課題

No.	研究員	部・グループ名	研究課題（概要）	区分	研究年度
1	岡崎則男	微生物部 呼吸器系細菌 グループ	<p>肺炎マイコプラズマの抗生物質耐性に関する研究</p> <p>国内において、2001年頃からマクロライド系薬剤に対して耐性を示す肺炎マイコプラズマ（以下肺炎マ）が出現し始めた。小児科領域における肺炎マ感染症の治療には本薬剤が第一次選択薬剤として使用されており、耐性菌が蔓延すると大きな問題となる可能性がある。そこで、薬剤耐性肺炎マの検出頻度の調査、迅速検出法、遺伝子解析、および耐性菌にも効果のある薬剤の模索等の検討をし、耐性菌の拡大防止に役立てる。</p>	継続	15～16
2	板垣康治	理化学部 アレルギー研 究プロジェクト	<p>農水産物の低アレルギー化に関する研究</p> <p>本研究では、最近問題となってきた野菜、果物および魚介類アレルギーに着目し、野菜、果物については、アレルギーを低減化することを目標とした栽培法の開発、育種を目指す。水産物に関しては、酵素法、発酵法、物理化学的方法によりアレルギーの分解、除去法を確立し、農水産物の低アレルギー化を図る。</p>	新規	16～18
3	大森清美	理化学部 食品成分グ ループ	<p>食品添加物の発がんプロモーション活性に関する研究</p> <p>発がんプロモーション活性評価のための毒性試験法であるBhas assayを用いて、日常にかつ直接的に暴露される化合物である食品添加物（抗酸化剤、保存料、色素、香料など）について、発がんプロモーターとしてのリスク評価を行う。さらに、発がんプロモーション活性を有する食品添加物については、メカニズムの検討を行うことにより、抑制物質の探索等の発がん予防的観点からの検討も行う。</p>	新規	16
4	小島 尚	理化学部 薬事毒性グ ループ	<p>いわゆるケミカルドラッグ成分(トリプタミン系化合物)の マウス行動に及ぼす作用について</p> <p>近年、麻薬や覚せい剤と化学的に類似した物質が“ケミカルドラッグ”と呼ばれ流通している。しかし、その化学的な性質や生体影響などが不明である。今回の検討では、特に、頻度の高いトリプタミン系化合物に焦点を絞り、中枢神経系に及ぼす影響をマウス行動量に及ぼす作用を指標に検討する。不明であった生体作用や毒性を解明され、生体障害や健康への危険性が明らかとなり、各種の施策や法的規制などの科学的な裏付けデータとなる。</p>	新規	16